

「干物箱」

— 2 稿 —

2023/1/13

雨森 れに

〈人物表〉

金本 明宏	(49)	藤田組幹部
高橋 圭介	(37)	金本の補佐
加藤 太一	(53)	服役中の受刑者
組長	(59)	藤田組組長
組員	(40)	金本に憧れる平組員
刑務官A		面会時に監視している
刑務官B		面会時に記録を取っている
落語家		刑務所に慰問

〈ログライイン〉

高橋を庇って受刑中の金本が、落語に出てくる与太郎と高橋を重ねる。
作者の狙い…どこにしようか他人を想うきっかけが存在する

〈落語・干物箱〉

放蕩息子に怒った大旦那が、息子を軟禁する。
遊びたい息子は風呂を理由に半刻の外出を手に入れる。が、風呂にしかいけないので半刻後に声真似のうまい与太郎に身代わりを頼む。
干物のおつかいを頼まれた時も、半刻後に与太郎を置いた。
しかし干物を取りに来た大旦那が部屋の外に来る。
「ダメになる前に干物をおくれ」「干物は干物箱に入れた」「なんだそれは。そんなものあるか。なんかおかしいなお前」「おかしいのは風邪をひいたからだ」とやり取りする。心配した大旦那が静止を聞かずに薬を持って入ってくる。バテていることも知らずに息子が帰ってきて、廊下から与太郎に声をかける。すると「この大バカ者！お前は勘当だ！」と大旦那の怒鳴り声が聞こえた。
「さすがは与太。親父の声もそっくりだ」と息子は感心する。

1 歌舞伎町・道路（夜）

パトカーの光。野次馬が遠巻きに見ている。金本明宏（49）がパトカーに誘導される。アスファルトの上には血だまりができている。

2 刑務所・外観（昼）

門の前にスーツ姿の高橋圭介（37）が立つ。

3 刑務所・面会室（昼）

金本と高橋がアクリル板越しに向かい合っている。部屋の上には刑務官Aが立ち、刑務官Bが書記をしている。

金本、申し訳なさそうに笑いながら、

金本 「大丈夫、大丈夫。ゼーんぶ償うよ」

高橋、刑務官Bが記録を記入しているのをちらりと見る。

高橋 「（小声で）やっぱり自分が」

金本 「いいって」

金本、高橋を見つめ、再度笑顔になり、頭を下げる。

金本 「けーちゃんばっかりに任せてごめんな」

刑務官A 「そろそろ時間です」

金本 「じゃ、また来てよ」

高橋 「（ため息）落ち着いたら来ます」

4 刑務所・門（昼）

刑務官に見送られ、高橋が歩いていく。

5 刑務所・金本自室（昼）

老眼鏡をかけて落語の本を読む金本。

6 藤田組・事務所（夕）

一般的な貸事務所。奥に重厚なデスク。その正面には作業用のデスクが向かい合うように4つ並び、出入口前には応接用のソファ。壁紙はヤニに染まっている。

作業用デスクで書類仕事をする高橋に組員（40）が近づく。

組員 「お前、金本さんが邪魔だったんだろ」

高橋 「そんなわけではないでしょう」

組員 「じゃあなんで幹部の仕事してんだよ」

組員、高橋の胸倉を掴む。

両者睨み合う。

高橋 「じゃあやってみたらいいんじゃないですか。俺

よりうまくできるようには見えませんがねえ」

× × ×

高橋の左頬に殴られた痕。書類仕事をしている。

組長（59）が事務所に入ってきて、奥のデスクに座る。

高橋 「（組長に気付いて慌てて立ち上がる）組長。お疲れ様です。あっこれ、確認していただいてもいいですか」

高橋、書類を渡す。

組長は書類を受け取って椅子に座り、高橋の顔を見る。

組長 「へえ。お前、根性あるなあ」

組長、笑って煙草に火をつける。

7 刑務所・作業室（朝）

長い作業台に向かい合わせで座り、木工製品を組み立てている受刑者たち。金本も淡々と組み立てている。金本の隣に座る加藤太一（53）が話しかける。

加藤 「今日、落語家さん来るんだってさ」

金本 「俺の事だろ」

加藤 「何言ってるんだよ。慰問だよお」

金本 「えー本日は満員御礼のありがたい客入りでえ」

金本、手に持っている木材で机をコンコンと叩く。

加藤 「だから金本さんじゃないって」

慰問会。演目は干物箱。並べられたパイプ椅子の最後尾列に金本と加藤が隣同士で座っている。

落語家 「この与太郎、声色が上手いと評判だ。若旦那は

ひとつ相談に乗って欲しい、ときりでした。つまりお金をやるから自分の声真似をして親父を騙してほしいということだ」

受刑者達、真剣に壇上を見つめる。

金本、腕を組み、下を向いて目を閉じる。

× × ×

落語家 「部屋の外から親父が「魚の干物はどこにしまっ

てある」と聞いてきて、とっさに「干物箱」と答えると「そんなものあるか。持って下りて来い」と言われる」

落語家、与太郎の困った顔を表現する。会場が沸く。

落語家 「「腹が痛くなった」「それは大変だ。薬を持って行ってやる」「もう直った」。これに怪しんだ

親父は部屋に入ってきた」

× × ×

落語家 「部屋の外から若旦那が「与太、与太。その紙

入れ取ってくれ」と声をかけたが、その瞬間。

「てめえ見てえな親不孝、どこへでも行っちめえ！」「おお。与太は器用だ、親父そっくり」

落語家、礼をする。周囲は大笑いで拍手喝采。

下を向いている金本の口元も緩む。

ざわついた雰囲気。受刑者たちがおのおの自由に過

ごしている。金本は本棚から落語関係の本を数冊抜き取り、テーブルにつく。金本に気付いた加藤が隣に座る。

加藤 「なあ、昼間の慰問さあ。落語って面白いねえ」

金本 「感動したなあ」

加藤 「へえ。どこに？」

金本 「んだよ。与太郎が身代わりやってやるどころだよ」

加藤 「びっくりした。ちゃんと聞いてたんだ。与太郎と大旦那とのやり取りが面白かったねえ」

金本 「そうそう。感動したんだよ。与太郎、健気だろ？」

加藤 「どこが健気に思えたよ？ あれはお金につられたバカじゃん。やっぱとこどろ寝てたから本で読んだな」

金本 「違うって。加藤さんこそ干物入れた箱、覚えてるか？」

加藤 「おお。干物いれとく箱なんて、刑務所のことみたいだよなあ。江戸時代は干物入れる箱を用意していたんだねえ」

金本 「そんなものはないから結果的にバレたんだって」

加藤、驚いた表情。

加藤 「え、そうだっけ（金本の本を指差しながら）もしかして、その本に書いてあった？」

金本 「今持ってきたばかりだよ」

10 刑務所・面会室（昼）

前回と同じ部屋。刑務官A、刑務官Bが控えている。

金本 「1ヶ月も経つと人間ってこんなに見た目変わるか？」

高橋 「周りから揉まれすぎて5キロ痩せました」

金本 「時間できたなら、こんなところ来ないで飯食え

「よ」

高橋、金本をじっと見つめる。

高橋 「金本さん、自分、決めました。お勤め代わりに
ます」

高橋、金本の後ろに控えている刑務官Bが記録を
取っているか確認する。

金本 「おい。けーちゃん。それは駄目だ」

刑務官B、顔をあげる。

高橋 「金本さんのほうが求められてるんです。だって
本当は金本さんは」

金本 「よせって」

高橋 「殺していな」

金本、高橋の最後の言葉を遮るようにアクリル板を
殴る。

金本 「いいから黙れって」

刑務官A Bが駆け寄り、金本を羽交い締めにする。

刑務官A 「やめなさい。金本、禁止事項だ」

金本、暴れる。

刑務官B 「おい。金本。懲罰房行きだぞ」

金本 「おめえは与太郎やってりゃいいんだよ」

刑務官A、暴れる高橋を部屋の端まで引きずる。

刑務官B 「面会は終わりです。ご退出ください」

金本 「オヤジにも気に入られてるんだろ。おめえがそ
のまま上に行ききゃいいんだよ。干物箱の与太郎
とはちげえんだ」

金本、床に押しさえつけられる。

高橋、無言。立ち上がり退出する。

11 刑務所・多目的室（夕）

本棚前のテーブル。加藤が座って数メートル先にあ
るテレビを見ている。そこに金本が現れる。

加藤 「早かったね」

金本 「アクリル板殴っただけだし」

加藤 「普段真面目だからかねえ」

金本 「たまには懲罰房も悪くなかったな。そうだ。この前の落語、加藤さん、読む？」

加藤 「本で読むってどんな感じ？」

金本 「うまくいかねえな。でもやっぱり与太郎は健気だな」

加藤 「金本さん、与太郎、好きだねえ」

金本 「おう」

終わり